

町川田遺跡（2）

令和元年度防災・安全交付金（道路）工事（関崎橋東）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年12月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の文化財第156集として刊行いたします本書は、長野県が施工する道路改良事業に伴って実施した、町川田遺跡の報告書であります。

発掘調査では、弥生時代後期と平安時代の住居跡や溝跡などの遺構と、土器のほか鉄製鎌や管玉が出土しました。

この調査成果が地域の歴史解明に一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、調査にご協力をいただいた事業者ならびに地域の皆様、また発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼を申し上げます。

令和2年12月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守

例 言

- 1 本書は、令和元年度防災・安全交付金（道路）工事に伴い、記録保存を目的として令和元年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査の実施については、長野県長野建設事務所長からの依頼を受け、長野市教育委員会（担当：文化財課埋蔵文化財センター）が直轄事業として実施した。
- 3 調査地は長野市若穂川田2562-10外に位置する。
- 4 発掘調査対象面積580㎡のうち、実質調査面積は160㎡である。
- 5 発掘調査は、令和元年9月9日から10月16日に行った。
- 6 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「ATS」のうち、光派測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため同所に委託した。

凡 例

- 1 遺構番号は、1次面と2次面でそれぞれに通し番号を付けた。本文中では遺構番号の前に面の番号を付け記載している。（例：1-SB1 = 1次面SB1）
- 2 遺構図は、調査区全体図（1：100）と、個別図（1：80）にて示し、このほか微細図などについては、適宜縮尺を示した。
遺構図中のスクリーントーンは焼土面を、破線部は炭化物の範囲を示す。
- 3 土器は洗浄作業後に分類・接合を行い、全形および残存部位にておおよそ1/4以上あるものを選別し図化した。特筆されるものについてはこれにかぎらない。
- 4 遺物図版については、土器実測図は1：4にて示し、断面白ぬきは弥生土器・土師器を、黒ぬりが須恵器を示す。また、スクリーントーンは、赤色が赤彩塗布、黒色が黒色処理の範囲を示す。
- 5 表2土器観察表の記載のうち「残存部」については、「部位」に全体のうち残存する部分を示し、「量」は部位で示した部分の内の残存量を示す。
- 6 遺物写真の番号は、実測図版番号と一致する。
- 7 遺跡の略号は「WKSH」である。
- 8 調査によって得られた出土遺物および諸記録は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにて保管している。

目次

序

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 調査経緯	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過（調査日誌抄）	3
3 調査体制	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡の立地	5
2 周辺の遺跡	5
第Ⅲ章 調査成果	7
1 調査概要	7
2 遺構	13
3 遺物	21
1 土器	21
2 石器・石製品	26
3 鉄製品	26
第Ⅳ章 まとめ	27
写真図版	28

挿図目次

図1 調査区位置図	1	図10 2-SB2・5実測図	16
図2 調査地位置図	2	図11 2-SB3実測図	18
図3 周辺遺跡位置図	6	図12 2-SB4実測図	19
図4 調査区全体図1次面	8	図13 土器実測図1	22
図5 調査区全体図2次面	9	図14 土器実測図2	23
図6 1-SB1実測図	13	図15 土器実測図3	24
図7 1-SB1カマド土器・石材出土図	13	図16 石器実測図	26
図8 1-SD1・2、SX1実測図	14	図17 石製品実測図	26
図9 2-SB1実測図	16	図18 鉄製品実測図	26

表目次

表1 遺構観察表	12	表3 石器・石製品観察表	26
表2 土器観察表	24	表4 鉄製品観察表	26

第 I 章 調査経緯

1 調査に至る経過

国道403号線関崎橋東詰交差点改良事業に係わる保護協議がはじめに行われたのは、平成24年度である。長野県長野建設事務所からの計画の提示を受けた長野市建設部道路課より照会があったもので、この中で市道新設部分に該当する町川田遺跡については、用地買収の進捗に合わせて試掘調査を行うことを協議した。その後、起因事業の都合により進捗がないことから協議も中断していたところ、平成30年6月に新設市道部分にて重機が稼働していることを、当センター職員が偶然目認した。急遽長野建設事務所に対して状況の説明を求めたところ、文化財保護法（以下、法という）に基づく通知をしないまま着工していたことが判明した。これを受け、6月21日に長野県教育委員会を交えた保護協議を行い、8月8日付で「埋蔵文化財保護に関わる法令の遵守について」とする注意喚起の通知を行った。

その後工事は一旦中断されていたが、令和元年度に再開されることを受け協議を行った結果、未施工の道路部分169㎡についての発掘調査を行うこととなった。令和元年6月3日付で長野建設事務所長より法第94条の通知を受け、これに対して6月14日付で長野市教育委員会から発掘調査の保護措置を勧告し、6月20日付で発掘調査依頼書の提出を受けた。

発掘調査は、9月9日から10月16日まで行い、令和2年1月17日に現道接続部分の工事立会を行った。発掘調査後に順次、出土遺物および写真・図版の整理作業を行い、令和2年12月に報告書を刊行した。

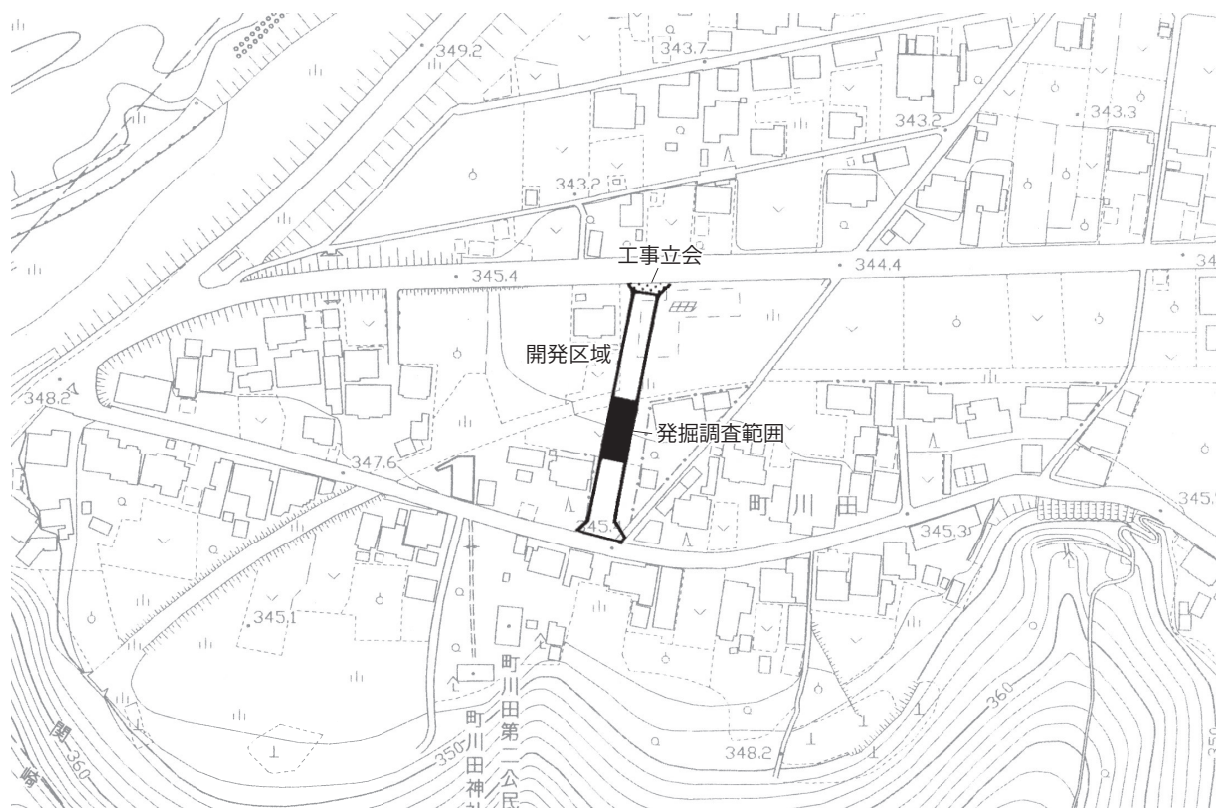


図1 調査区位置図（1：2,500）



調査地周辺航空写真



図2 調査地位置図 (1 : 10,000)

2 調査の経過（調査日誌抄）

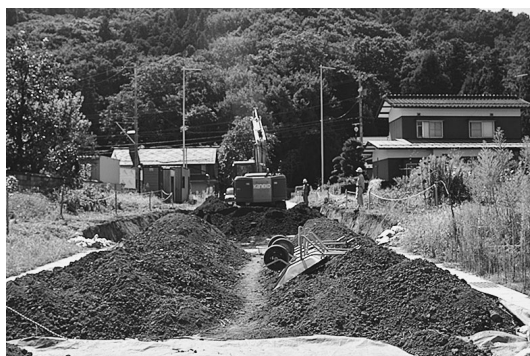
- 9月9日（月） 重機による表土掘削作業。調査区北側から掘り下げを行う。
- 10日（火） 重機による表土掘削。作業員参加による調査を開始、北側から検出を行う。
- 11日（水） トレンチを数ヶ所設定、獣骨と土器片を確認した位置から鉄鎌が出土する（SX1）。
- 13日（金） 調査区北側トレンチで弥生土器が多く出土、ほかのトレンチから検出面の下に弥生土器を含む面を確認。
- 17日（火） 調査区北側トレンチと遺構の掘り下げ。
- 19日（木） 調査区全体にトレンチを入れ、遺構の確認、南側で石と土器の集中箇所を確認する。
- 20日（金） トレンチを広げ、SB1のカマドを検出し全体を掘り下げはじめる。
- 25日（水） SB1掘り下げ。午後から測量とカマド図の作成。
- 26日（木） 測量図結線、SB1土器取り上げを行い1次面終了。2次面の重機掘削作業開始。
- 30日（月） 遺構検出作業。住居を3軒確認する。
- 10月1日（火） 調査区中央の住居の検出とSB1掘り下げ。
- 2日（水） SB2・3掘り下げ。
- 3日（木） 住居掘り下げ。住居は全部で5軒を確認。
- 4日（金） 排水作業後、遺構掘り下げ。（SB1・4・5）
- 7日（月） 午後からの作業。住居と土坑の掘り下げ。
- 8日（火） SB4床面付近の炭化物・土器を確認しながら掘り下げる。SB1・3炉とピットの完掘後に個別写真を撮影。
- 9日（水） SB4の床面と炭化物の入った土坑を検出、炭化物の堆積状況は調査区北壁で確認を行う。朝から清掃を平行して行い、SB2・5の個別写真の撮影。
- 10日（木） 午前：調査区全体清掃後、11時前から空撮。遺構個別写真の撮影。午後：測量。道具の片づけを行い、作業員作業を終了する。
- 11日（金） 測量図結線。調査区壁面の確認を行い、現場での作業を終了する。



1次面重機表土除去作業



作業風景（1次面）



2次面重機表土除去作業



作業風景（2次面）

3 調査体制

令和元・2年度

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として、長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守	
調査担当	文化財課	課長	小柳仁彦	
調査機関	埋蔵文化財センター	主幹兼所長	石田 正路 (令和元)	
		所長	大井久幸 (令和2)	
		課長補佐	飯島 哲也	
	庶務担当	係長	小林 晴和	
		事務職員	宮本 博夫	
			宮崎 千鶴子 (令和元)	
			平林 満美子 (令和2)	
	調査担当	係長	風間 栄一	
		主事	小林 和子	
		研究員	田中 暁穂	遠藤 恵実子 (主任調査員)
			篠井 ちひろ	清水 竜太
			小野 涼香	社本 有弥 (令和元)
			井出 靖夫 (令和2)	伊藤 愛 (令和2)

発掘作業員	岩井 洋芳	植木 義則	大日方 英雄	金井 節	北城 隆子	塚原 素子
	月岡 純一	徳嶽 まゆ美	松本 糸子	峯村 茂治		

整理調査員	青木 善子	市川 ちづ子	鳥羽 徳子	武藤 信子
-------	-------	--------	-------	-------

整理作業員	飯島 早苗	清水 さゆり	西尾 千枝	待井 かおる	宮島 恵子	三好 明子
-------	-------	--------	-------	--------	-------	-------

遺構測量業務	株式会社 写真測図研究所
--------	--------------

重機等貸借業務	松代建設工業株式会社
---------	------------



発掘調査参加者

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

町川田遺跡が位置する川田地区は、長野市の東部、保科若穂・若穂綿内・松代大室に接する場所にある。千曲川と犀川の合流地点東岸に位置し、奇妙山や妙徳山といった標高1,000mの河東山塊に囲まれ、千曲川の氾濫源と支流の河川の堆積によって形成された複合扇状地である保科川扇状地と、千曲川東岸の町川田から牛池にかけて幅1kmにおよんで発達した自然堤防が広がる。この中で町川田の集落は自然堤防に残る中州状の微高地にある。

2 周辺の遺跡

保科扇状地では、扇状地扇頂部でチャート製有舌尖頭器が出土し、このほか扇端部では王子塚遺跡（6）・十二山遺跡（16）があり、さらに扇央西端に位置する宮崎遺跡（12）は、中期末の敷石住居をはじめ後期から晩期を中心とした遺跡で、後期から晩期前半の石棺墓が確認されている。

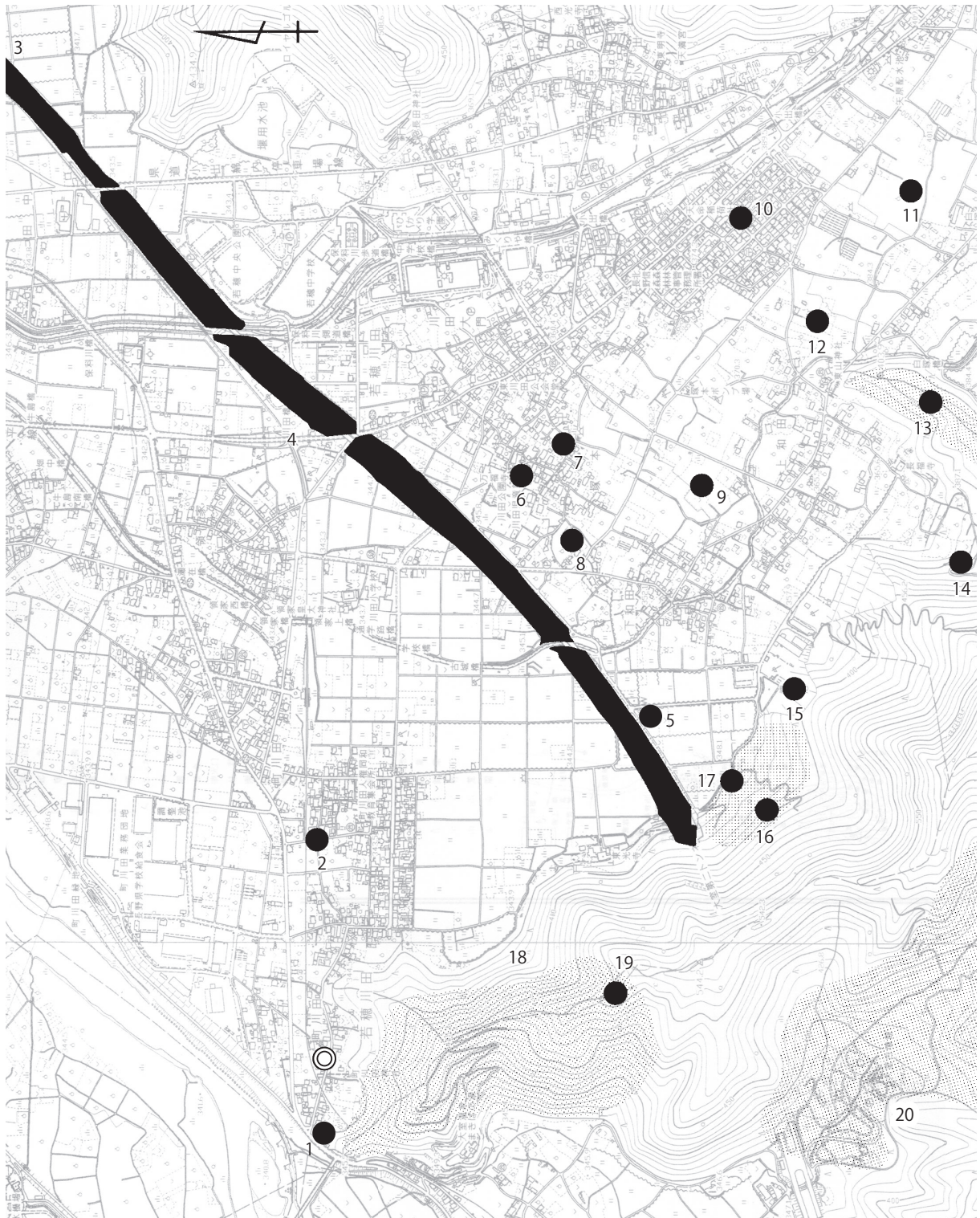
弥生時代以降には自然堤防上にも集落が造られるようになり、町川田遺跡（2）では弥生時代中・後期の集落が確認されている。また自然堤防と城ノ峰西の後背湿地に位置する春山B遺跡（3）は、弥生時代中期後半と中葉、後期終末期を主体とした集落で多量の有孔土製円盤や石器の製作が行われた状況が示されている。

古墳時代では、挙手人面土器が出土した祭祀遺跡である片山遺跡（14）と、このほか塚本遺跡（8）においても遺構は確認されているものの、保科川扇状地での集落の確認は現時点ではみられない。しかし古墳群が多く存在する場所であり、遺跡が展開する扇状地と自然堤防を囲む丘陵上にみられる。奇妙山の尾根上には和田東山古墳群（12）、この隣の大星山頂の稜線上には大星山古墳群（15）、十二山古墳群（16）、大室古墳群北山支群（17）が位置し、和田東山古墳の3代にわたる系譜を示す3基と大室18号古墳（19）の1基の前方後円墳が継続して造営され、さらに和田東山古墳と時期を同じくして4基の円墳と方墳からなる大星山古墳群が造られている。保科川・赤野田川に挟まれた扇状地上には白塚古墳群（11）、長原古墳群（10）が位置する。長原古墳群は10～13基ほどからなる積石塚古墳群であり、この内の7基で調査が行われ横穴式石室であることが確認されたが、ニカゴ塚古墳（大正14年消失）は合掌形石室であった。

また、千曲川右岸に位置する川田条里遺跡（4）では、遺跡が位置する後背湿地のほぼ全面に広がる表層条里の下から、洪水砂等によって埋没した弥生時代中期～近世の水田跡が検出されており、これにより各時代による水田区画の変化をみることができ、出土遺物は畦畔の芯材などの建築部材をはじめ農具や祭祀具といった木製品が多いことが特徴である。

集落は扇状地には縄文時代から展開し、弥生時代以降には自然堤防上に広がり、古代まで連続してみられるが古墳時代については不明である。こうした集落の状況に対して遺跡を囲む丘陵上に前方後円墳や積石塚をはじめとした古墳群が造られ、尾根際に祭祀遺跡がみられるのも特徴である。このほか後背湿地に造られた水田遺跡が存在し、水田生産に伴う祭祀行為がみられる場所である。

近接する町川田遺跡（昭和62年度調査）とは、自然堤防上に造られた同じ集落であるが、本調査区では弥生時代後期と平安時代と前回調査よりも時期が限られる。位置ではより千曲川に近く、山の際まで集落が造られていることから、弥生時代後期には集落は自然堤防上に広く展開していくことがみられる。



1 関崎遺跡 2 町川田遺跡 3 春山B遺跡（高速道路地点） 4 川田条里遺跡（高速道路地点） 5 川田条里の遺構（圃場整備地点） 6 王子塚遺跡 7 王子塚古墳 8 塚本遺跡 9 和田塚本遺跡群 10 長原古墳群 11 白塚古墳群 12 宮崎遺跡 13 和田東山古墳群 14 片山遺跡 15 大星山古墳群 16 十二山古墳群 17 十二山遺跡 18 大室古墳群（北山支群） 19 大室古墳18号墳 20 大室古墳群（大室谷支群） ◎ 町川田遺跡（本調査区）

図3 周辺遺跡位置図（1：15,000）

第Ⅲ章 調査成果

1 調査概要

調査は2面を対象に行った。1次面は平安時代、2次面は弥生時代後期で、確認した遺構は平安時代で住居1軒、溝2条、性格不明遺構2基、土坑・ピットを、弥生時代後期では住居5軒、土坑・ピットである。

1次面では、全体的に遺構の検出が明確ではなかったことから、はじめに調査区内の数ヶ所にトレンチを設定し遺構の検出を行った。この中で、調査区北側の東西壁面のトレンチで検出面から深さ30cmまでの間に弥生時代後期土器が多く出土したことから、弥生時代の遺構が先に検出していた平安時代と同じ面に存在するものと考えられたが、調査区中央から南側のトレンチで下面確認を行ったところ、1次面検出面よりおよそ40cm下で包含層を確認し、平安時代と弥生時代後期の2面が存在することを確認した。

1次面は、検出の時点で土器と獣骨片を数点確認した箇所があることから、この範囲を中心にグリッドを設定したところ、同じ位置で鉄鎌1点を検出した。遺構の範囲の確認はなく、獣骨片がこれよりも広い範囲で見られることから壁面での確認も行ったが、掘り込みはみられなかった。溝は、SD1は北東から南西の方向にのび、これよりも南に位置するSD2は東西方向で、西側は調査区内で収束する。住居は、調査区南側で石が露出する箇所があったことから、確認のためのトレンチを入れたところカマドを検出した。平面での遺構の範囲を検出することができなかつたため、トレンチで掘り下げた結果、カマドは北東方向を向き、遺構の範囲は、カマドのある北と東側で確認したが西側はカクランが重複することから不明、南側も平面では明確でないものの、トレンチでの確認を行った。

2次面は検出の時点から1次面よりも土器の出土が多く遺構の検出も明瞭で、調査区全体に遺構が広がる様子を確認することができた。弥生時代後期の住居は、調査区全体で密に存在している。SB1は調査区南西端で一部の検出であるが、北東壁側に円形の焼土面とその手前（住居内側）に長方形の川原石が置かれた炉を検出した。SB2とSB5は一部重複し、SB2は焼土面（石材はなし）とその周辺に土器と石皿が床面から出土したのみであるが、SB5では床面全体から土器が出土し、他の住居よりは明確ではないものの焼土面と石材のある炉を検出した。SB4は調査区北端の1次面で弥生後期土器が多く出土したトレンチ1・2の下面に位置する。土器が多く出土し、中でも住居中央やや西寄りに炭化物の堆積部分に多くみられ、同じ位置から鉄石英製の管玉が出土した。弥生時代後期の住居はすべて、平面形と規模、炉の形態などほぼ同じ様相である。炭化物の状況からみるとSB4のみ異なっており、住居廃棄に関しては集落の中での差があったことがうかがわれる。

1次面検出面から2次面検出面までは15cmの包含層を挟んで約50cm下となり、2次面遺構の覆土まではレキ等をほとんど含まない層であるが、2次面の住居床面直下からは調査区全体でレキ層となっている。また、調査後の令和2年1月に行った本調査区より北側の現道接続部分（図1）の立合調査では、現地表面から20cm下の盛土直下からレキを含む砂層に、70cm下からは灰白色の砂層となっておりこの位置では遺構が存在しないことを確認した。

本調査の面積は広くはないが、平安時代と弥生時代後期の集落を確認し、特に弥生時代後期では住居が密に存在している様子がみられ、調査区の北側、千曲川側では遺構が存在しない砂層を確認した。本調査地は、弥生時代以降千曲川の自然堤防上に位置するようになった集落のうち、弥生時代後期と以降間において平安時代になり再度集落が展開している。

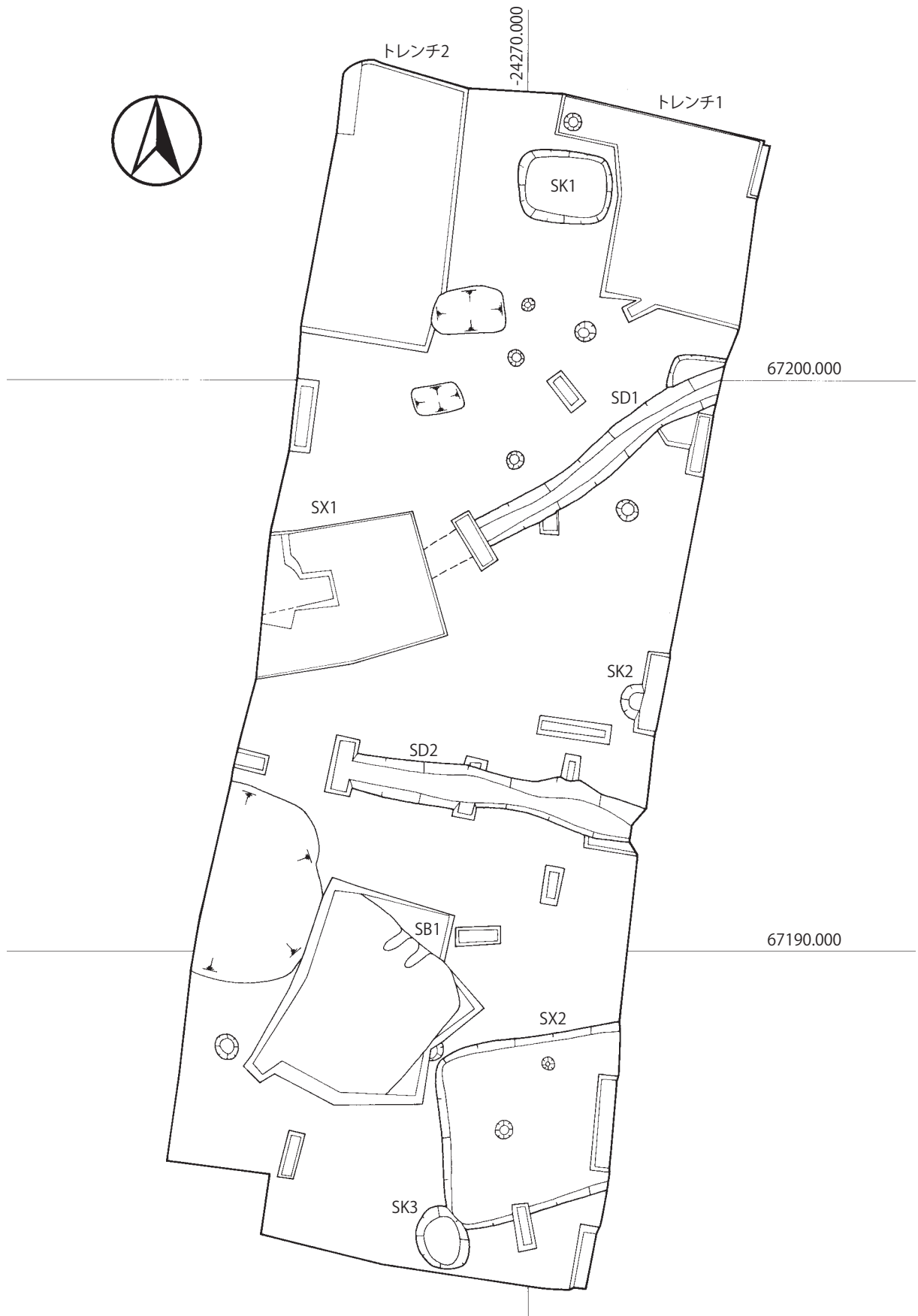


図4 調査区全体図1次面 (1:100)

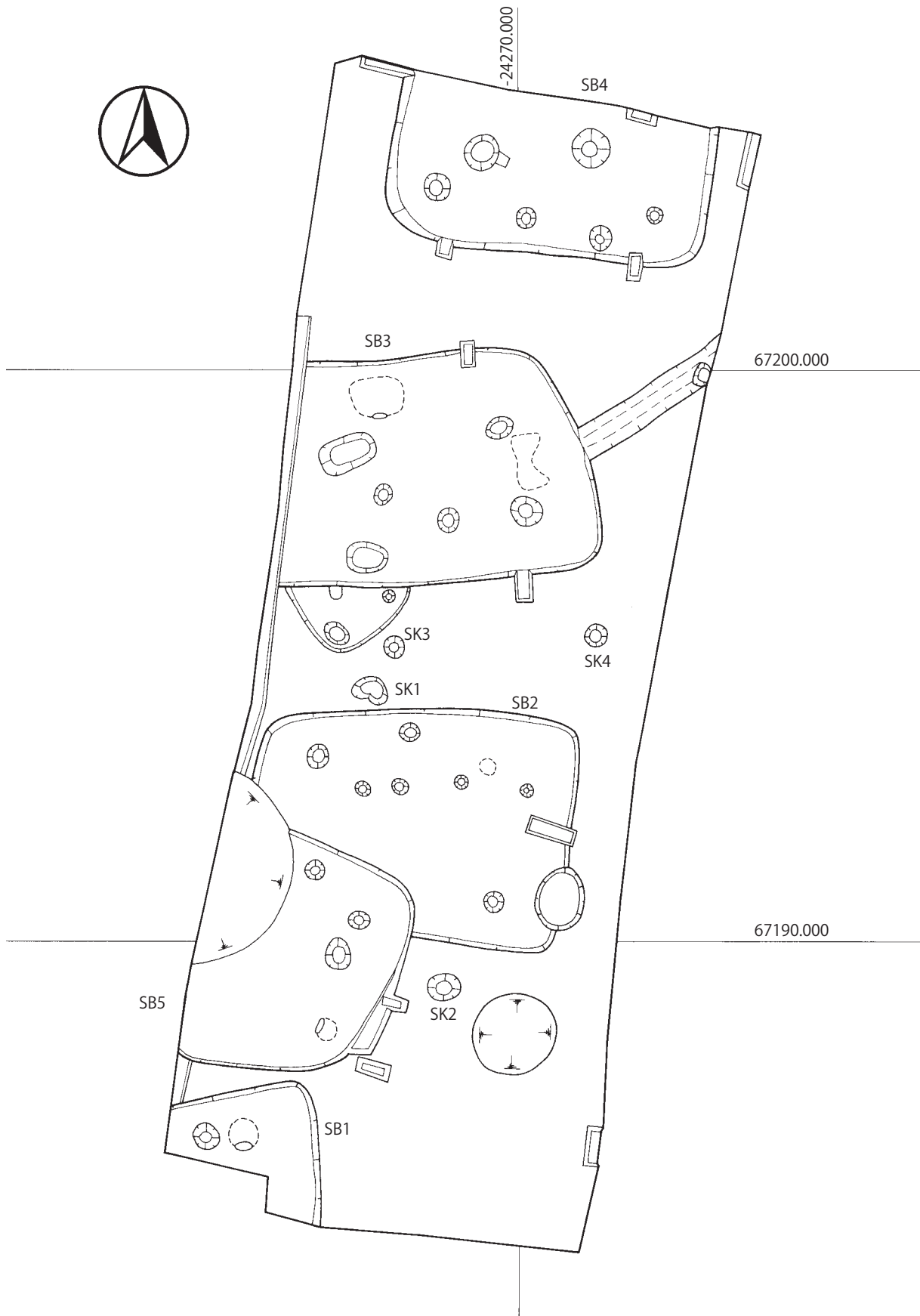


图5 調査区全体図2次面 (1:100)



調査区1次面全景（南から）



調査区2次面全景（南から）



調査地遠景（令和元年10月10日撮影）



調査区（2次面）空撮（上＝東）

表1 遺構観察表

面	遺 構						土 器		その他 遺 物 図 版
	遺構名	時 期	平面形 規模 m	検出率	施設・主軸・重複 ほか	個別 図版	出土量 (g)	実測数	
								図 版	
1	SB1 1号住居	平安時代	方形 (4.0×3.7)	2/3	カマド：構築材・周辺土器。	図-6・7	5,420	7 図13-1~7	
1	SD1 1号溝	平安時代	幅： 0.48~0.55	一部	南西~北東方向、 両端とも調査区外。	図-8	405		
1	SD2 2号溝	平安時代	幅： 0.6~1.3	一部	東西方向、東側端を検出。	図-8	480		
1	SK1~3	平安時代・ 弥生後期	円形・方形				360		
1	SX1 性格不明 遺構1	平安時代			遺物確認の範囲。 掘り込みの確認はない。	図-8	565	2 図13-8・9	鉄製鎌 図18
1	SX2 性格不明 遺構2	平安時代	方形	完	弥生後期~平安時代土器、落ち込み の可能性。		2,040	1 図15-51	
1	トレンチ 1・2				弥生土器出土多い、弥生時代面包含 層の遺物。		8,830	11 図15-40~50	
1	トレンチ 3~12				遺構・下面確認。		795		
1	検出面					図-12	6,690	3 図13-10・11 図15-54	
2	SB1 1号住居	弥生時代 後期	(長)方形 -	1/4	北東隅に炉。	図-9	780	1 図13-12	
2	SB2 2号住居	弥生時代 後期	長方形 5.6×4.1	完	住居北東側に炉と周辺に土器と石皿。	図-10	1,670	2 図13-13・14	石皿1 図16-2
2	SB3 3号住居	弥生時代 後期	長方形 (5.7)×4.0	4/5	北側中央に炉・炭化物と東側に炭化 面。	図-11	1,055	2 図13-15・16	
2	SB4 4号住居	弥生時代 後期	長方形 5.6×-	1/2	遺構中央床面直上に炭化物の堆積が あり、土器片が多く出土。 炭化物のある土坑1	図-12	13,695	16 図13-17・18 図14-19~32	石皿1 図16-1 管玉1 図17
2	SB5 5号住居	弥生時代 後期	長方形 -×4.3	1/2	床面に土器が置かれる、東隅に炉の 可能性あり。	図-10	5,350	7 図14-33~39	
2	SK1~4	弥生時代 後期	円形	完			330		
2	トレンチ						360		
2	検出面						1,120	5 図15-52・53 55~57	

計：49,945g

2 遺 構

<平安時代>

・ 1-SB 1

遺構の検出は明確ではなく、トレンチにてカマドの石材を確認したものである。平面での検出が明確にできなかったことから、トレンチを中心とした検出となり、カマドのある北と東側、南側は面で広げることではできなかったがおおよその範囲を確認した。西側カクランによって切られているが、以上から規模は4.0×3.7mと推定される正方形の住居である。トレンチの中であることから壁面の検出はないが、検出面から床面までの深さは30cmあり、カマドおよび土器を良好な状態で検出することができた。

カマドは北東壁に位置する。袖石と支脚石が残り、天井石は前面に落ち、周辺には土器が置かれた状態での検出である。

出土土器の多くがカマド内とその周辺からであるが、住居中央では覆土中から完形の杯と25～30cm大の石がみられた。石はカマド近くで床面に接するものと、中央部分の床面よりも高い位置のものがあり、遺構掘り下げ時に覆土の堆積状況を見られなかったが、土器がカマドのものと同時期であることから、廃棄後一度に埋没したことが考えられる。

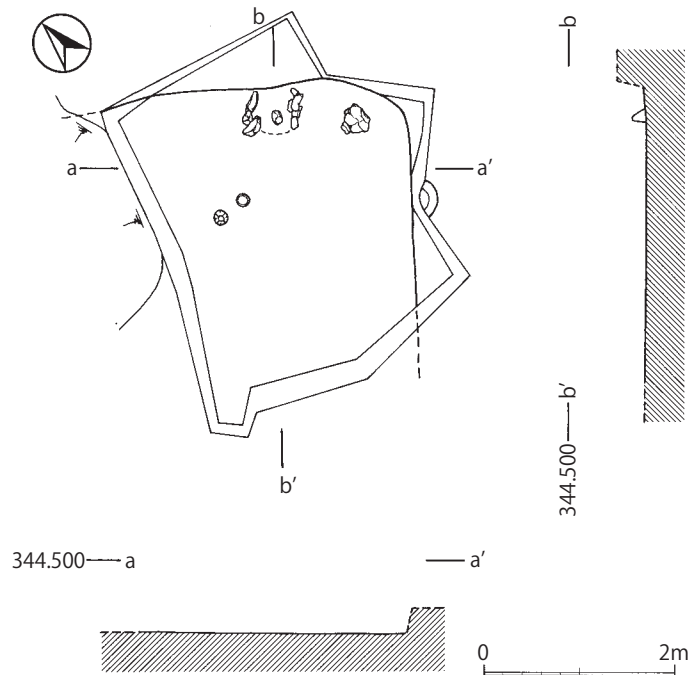


図6 1-SB1 実測図 (1:80)

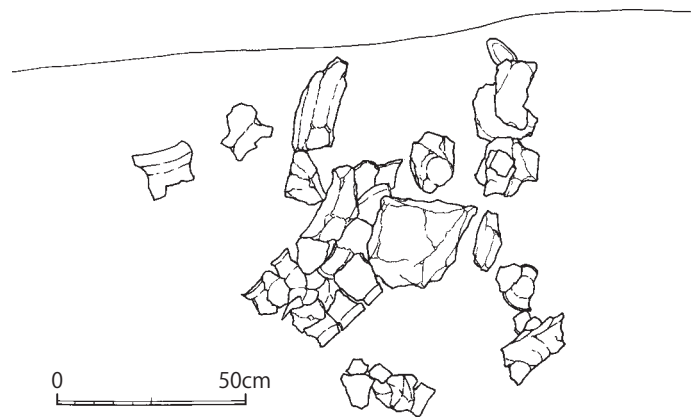
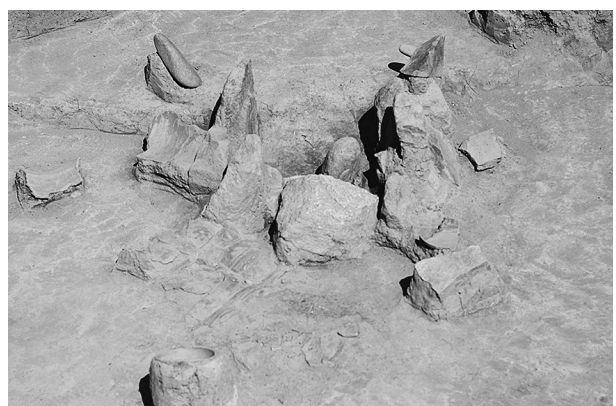


図7 1-SB1 カマド土器・石材出土図 (1:20)



1-SB1 全景 (南西から)



1-SB1 カマド・土器 (南西から)



1-SB1 カマド



1-SB1 カマド土器取り上げ後

・ 1-SX1

検出時から土器片と獣骨片が出土していたことから、確認のためにグリッドを設定した箇所である。範囲については、土器など遺物の出土状況により広がっていったものであり、SX1として示した範囲はおよそ同じレベルにある遺物の検出の範囲を示していることから、遺構の範囲を示したのではなく遺構確認のグリッドに近いものである。

特徴は、ほかの位置ではみられない土器や獣骨（牙齒）片が同じレベルで点在し、これと同じ位置で鉄製鎌が出土している。遺物のみであることから、包含層が残った部分である事が考えられるが、調査区壁面での確認から遺物は包含層よりも下に位置している。

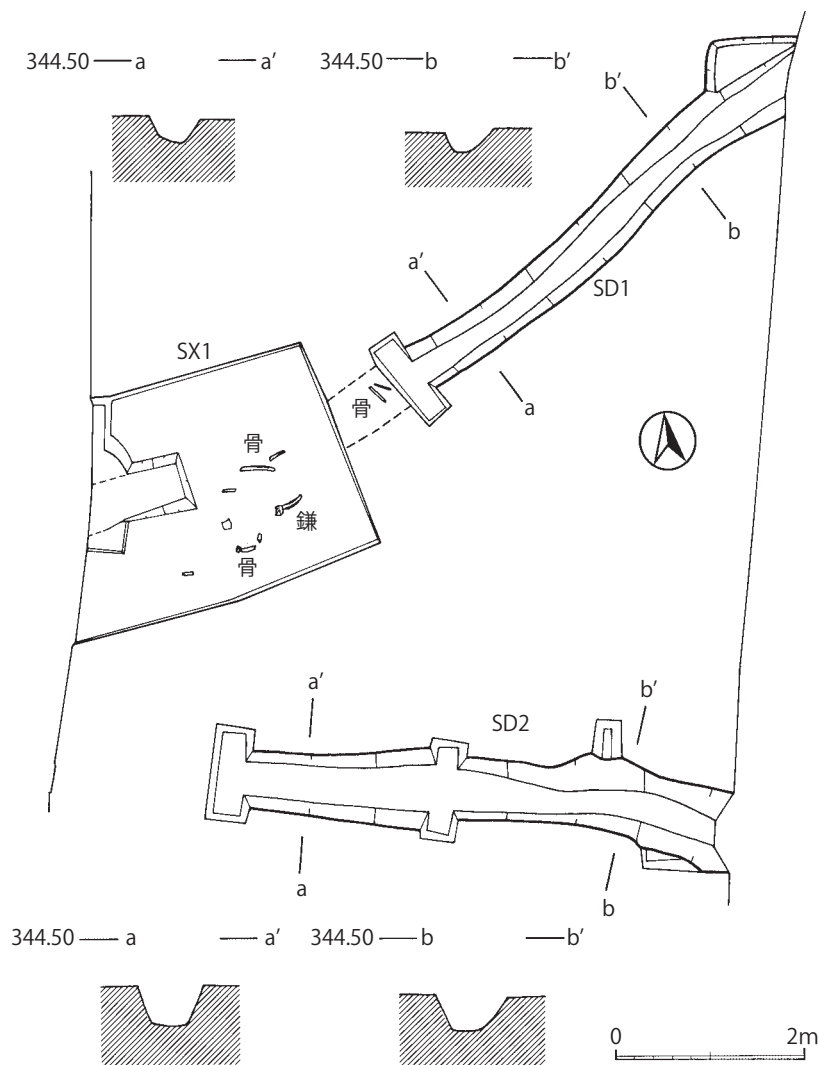


図8 1-SD1・2、SX1実測図（1：80）

・ 1-SD1

北東から南西方向にのびる溝で、両方とも調査区外にかかる。溝幅は48～55cmで、底部が幅17

～30cmほどの逆台形に近い形で、検出面からの深さは26～30cmほどである。遺物は覆土中から僅かであることから、細かな時期の判断はできないが、西側がSX 1の下となる可能性があることからSX 1よりも古い時期であることが推測される。

・ 1-SD 2

東西方向にのび、東側調査区外であるが、西側は端部を検出した（図8 西端トレンチ部分）。溝幅は60～130cmで一部細くなり、深さは40cmで断面は底部がおよそ30cm幅の逆台形である。SD 1と同じく遺物の量は少ない。

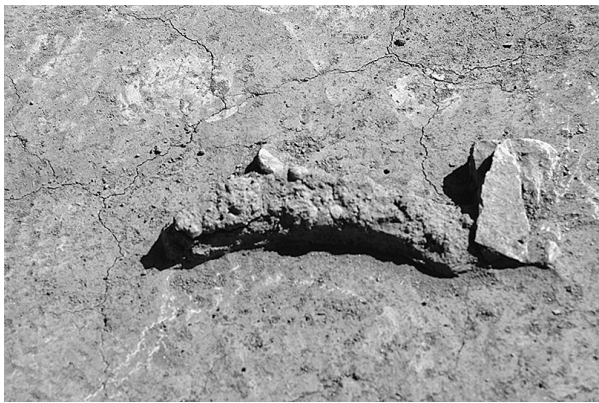
SD 1とSD 2は、方向もほぼ同じで断面形態など類似する点が多い。SD 1とSX 1が重複関係にあることが考えられるが、遺物の出土が少ないことから他の遺構と同じ平安時代とするにとどまる。



1-SX 1 全景（北東から）



1-SX 1 遺物出土状況（南西から）



1-SX 1 鉄製鎌出土状況



1-トレンチ 2（西から）



1 次面調査区北側（南から）

<弥生時代後期>

・ 2-SB1

調査区南西隅に位置し、検出は、全体の1/4ほどである上に中央にトレンチが入ることから検出範囲は少ない。

住居北壁側の東寄りで炉を検出した。径45cmほどの円形の焼土面の南端に長さ29cmの横長の石が置かれているもので、硬化面とその周囲に炭化面がある。床面の検出は明確であるが、部分的にレキが露出しており、トレンチの断面からもしまりのある床の直下からレキ層となることを確認した。

覆土中からの検出時から周囲での土器の出土は多く、完形の鉢(図13-12)は床面、北壁に接した位置から出土した。

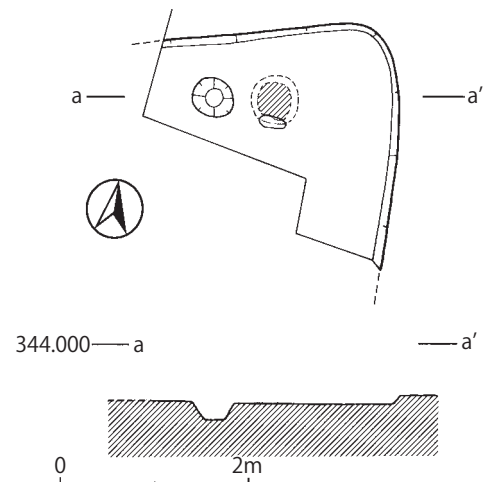


図9 2-SB1実測図(1:80)

・ 2-SB2・5

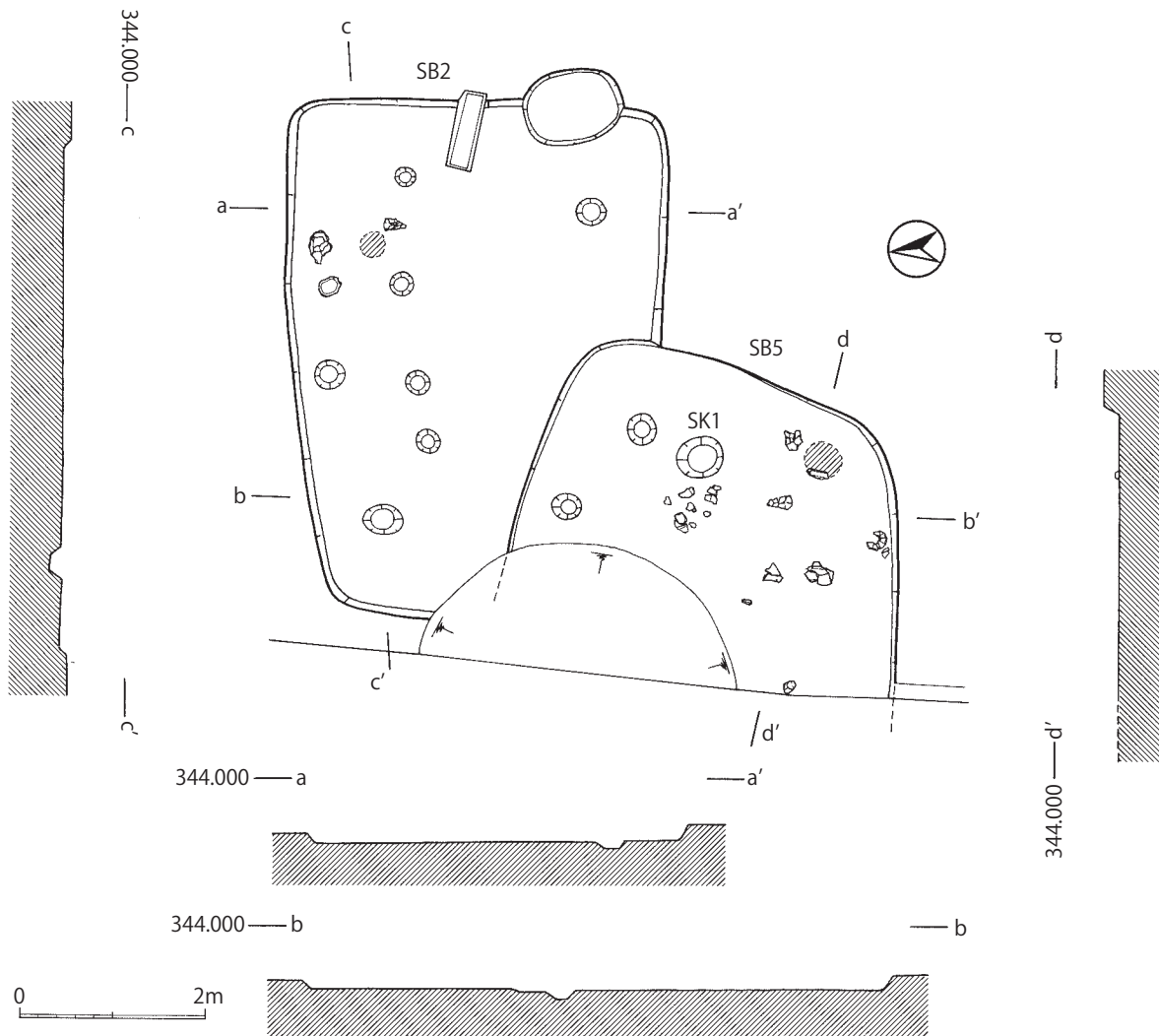


図10 2-SB2・5実測図(1:80)

SB2の南西にSB5が重複し、SB5の西側にはカクランが入っているため、遺構の検出はSB2が全体の約4/5、SB5が1/2ほどの検出である。

SB2は平面形が長方形で、床面は黄褐色の所々で硬く締まった面がみられる。覆土中からの遺物の出土量は少ないが、北壁面の東寄りの位置で比較的形が残る土器と石皿を床面から検出した。これらの遺物は径が約25cmの焼土面の周囲に位置しており、この焼土面には他の住居の炉にみられる横長の石は見られないが、住居内での位置と周囲に遺物が置かれている状況であることから、炉である可能性が考えられる。また、南側ではSB5が一部重複するが、全体の規模を確認することができたもので、長辺が5.6m、短辺が4.1mである。

SB5は、はじめから検出が不明瞭であり、特に北側はSB2の掘り下げの段階で確認をしたことから、北側壁面の重複部分の立ち上がりの検出はないが、南側では検出面から床面まで16cmの深さがある。平面形は長方形であるが、他の住居よりも隅が丸くなっている。検出範囲は少なく掘り込みも深くはないものの覆土中から土器が多く、床面では全体に形が残る土器を複数検出した。床面全体に土器が置かれていたことがうかがわれる。このほか東壁の南寄りの位置には径40cmほどの円形の焼土面がみられ、焼土面自体は薄い状態ではあるが、西側に焼けた痕跡のある長さ26cmの石があることから炉である可能性が高い。また、炉の反対側にあたる北壁面付近では炭化物がうすく広がる面がみられる。床面は中央部分を中心に全体的に硬く明確であるが、直下がレキ層であることから所々でレキの露出部分があり、住居内ピットの底面はレキ面となっている。



2-SB1 全景 (南から)



2-SB2・5 全景 (西から)



2-SB2 床面遺物出土状況 (東から)



2-SB5 全景 (西から)

・ 2-SB3

平面形は長方形で、南東隅がやや張り出した形である。西側は調査区外に一部がかかるものの、ほぼ全体を検出しており、規模は短辺が4.0m、長辺は推定で5.7mである。

検出面から床面までの深さは17cmほど、床面は明るい赤褐色で住居の中央を中心に全体に硬く緻密であるが、床面の直下からはレキがみられ、住居内の土坑は底面がレキ面となっている。床面からの遺物は他の住居よりも少ないが、炉をはじめ床面での炭化物や焼土面が明確である。

炉は北側壁の中央に位置し、1.0×0.7mの長方形に近い形で南側（住居内側）に長さ25cmほどの石が置かれ、内側は焼土面で、底面まで深さは6cmで、炭化面は端部からすり鉢状に堆積し、焼土は検出面から底面まで同じ厚さで堆積している。また炉の周辺でも炭化物面があり、東壁中央（図11-SK1・2の間）にも、炭化面が広がっている。

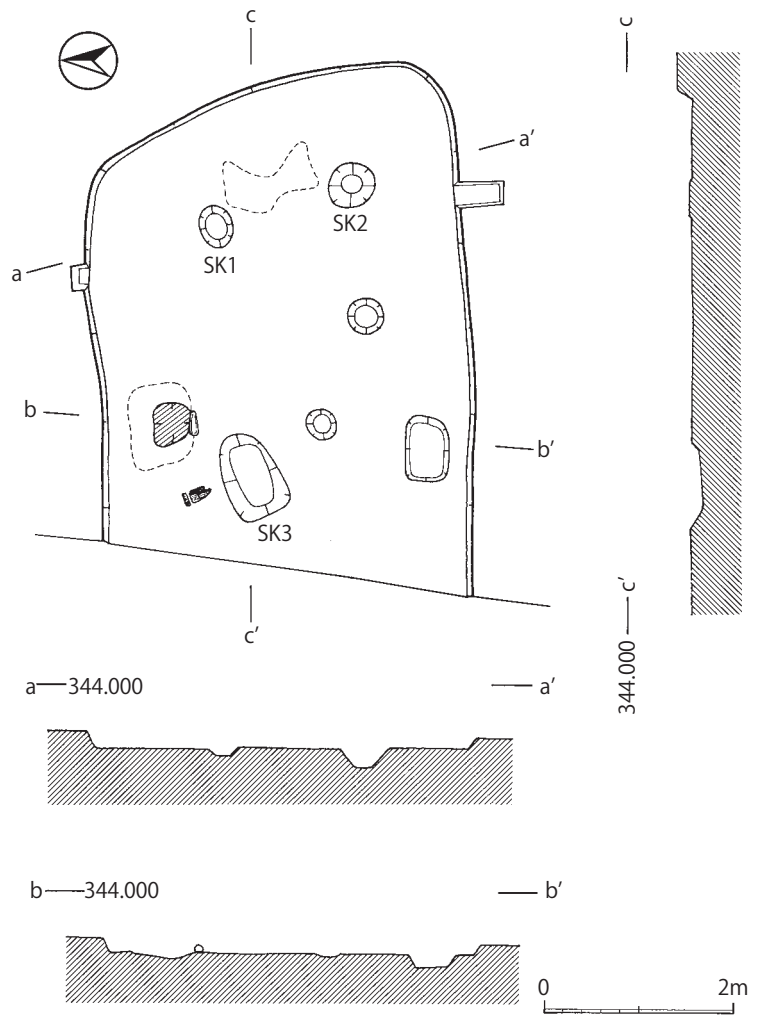
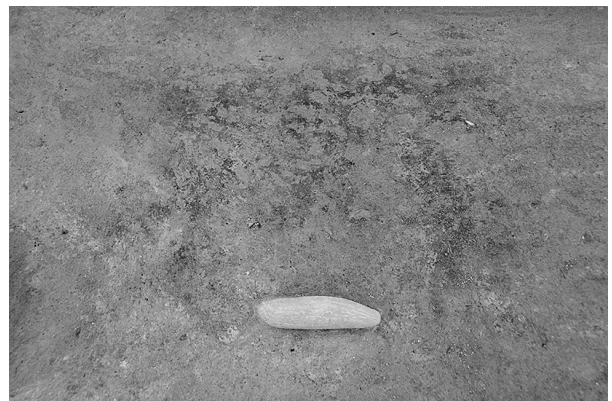


図11 2-SB3実測図（1：80）



2-SB2床面遺物出土状況（東から）



2-SB5全景（西から）

・ 2 - SB 4

調査区北端にかかるため、遺構のおよそ半分が調査区外となっている。平面形は長方形で、規模は東西方向が5.6m、このほかの住居例から、東西が長辺となり、短辺（南北方向）はおおよそ4.0mと推測される。

1次面で弥生後期土器が多く出土したトレンチ1・2の下に位置しており、2次面でも検出時から土器が多くみられた。検出面の15cm下から炭化物がみられはじめ、これとともに遺物量も多くなっていった。この高さで全体を出したところ、炭化物は覆土に混じった状態で全体に広がり、特に住居の中央付近から西側壁面にかけての住居の中央部分にあたる調査区壁面で東西に3.4m幅の形の残る土器を含む炭化物の堆積を検出した。調査区の壁面からの覆土堆積をみると、床面から10cm上でレンズ状に堆積した炭化面が確認できる（図12-上の断面図）。中央の一番厚い所で10~13cm、端部は床面から15cmほど上となり、この高さ（破線部分）から床面にかけて特に土器が多く出土している。また、炭化物範囲の中央に近い部分から土器は完形に近いものが多く、同じ位置で管玉1点が出土している。これ以外では破片が多く、炭化物の堆積層とその周辺、さらにこれよりも上部の覆土では堆積の状態が異なるものとみられる。

床面は、住居の中央から明褐色の硬く締まった面であるが壁面際にはみられない。また他の住居と同様に直下からレキ層となることから所々でレキが露出している。土器は床面に接した位置で出土したものもあり、石皿は床面で土器と一緒に検出した。住居内の土坑のうちSK1は、床面での検出時から細かな炭化物がみられ、遺構内では炭化物が側面から底面に接した状態であった。なお、このほかの土坑からは炭化物および遺物の出土はなかった。

弥生時代後期の住居では、床面に炭化物や土器が置かれているものが多かったが、この中で本住居については、炭化物の堆積状況や出土土器の量、さらに管玉など様相が異なっている。住居の規模は全てがほぼ同じであるが、住居廃棄においては差があったことがうかがわれる。

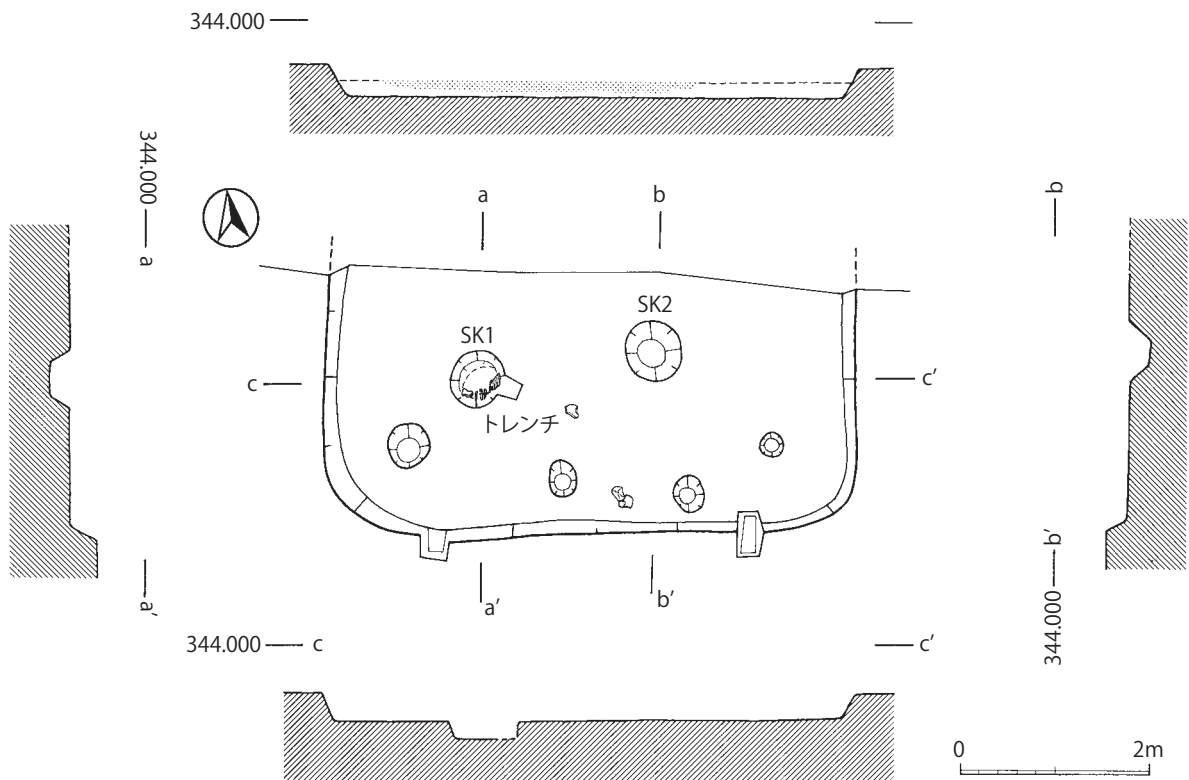


図12 2-SB4実測図（1：80）



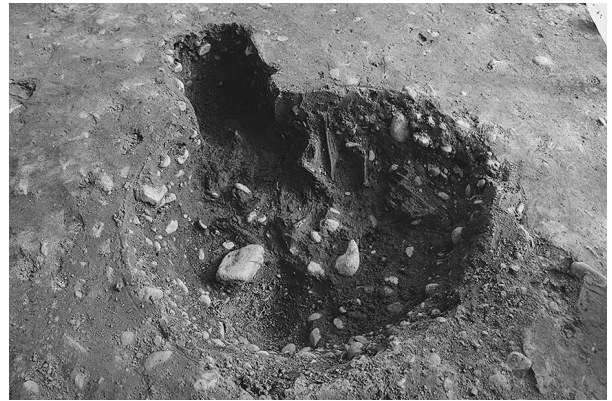
2-SB4 全景 (北から)



2-SB4 全景 (南西から)



2-SB4 炭化物面検出状況 (南西から)



2-SB4 内 SK1 炭化物



2次面全景 (北東から)

3 遺物

1 土器

<平安時代>

住居（1-SB1）出土は、杯は土師器が中心で黒色処理が多く、ロクロ調整の底部回転糸切りとヘラ切りが共存する。このほか底部糸切の高台付杯と、SX1の内面黒色杯（8）はヘラ切で、長頸壺（9）は自然釉である。全体的に須恵器が少ないのに対して黒色土器が多く、ロクロ調整の底部は糸切とヘラ切とが共存している。以上から、本調査地での時期は9世紀中葉～後半である。

<弥生時代後期>

主な出土位置は、住居および1次面トレンチ1・2を含めた包含層である。

・甕：文様は、口縁部から胴部最大径の位置までの波状文と、頸部は簾状文、直線文、波状文のみとがみられる。施文の順序は簾状文→波状文であり、文様は33のように丁寧な施文のものは少なく、特に13・14では波状文が粗雑な崩れた形の施文となっている。また、ここでの直線文のある13・20では、波状文自体が崩れた形であり、特に20では間隔のあいた直線文の上に波状文が全体にかぶっている箇所があることから、文様の意味をなしていない形ともとれる。51は波状文で口唇部に刺突めぐる。器形では17は口縁が短く外に開き、このほかは頸部が上部にのびる形である。

・台付甕：25は丸い胴部の最大径の位置までの波状文、50は細い胴部で口縁が開き文様は波状文と簾状文である。

・壺：40は赤彩で頸部T字文、32はT字文の間に穿孔がある。赤彩は26で胴部全体に、35は胴部最大径から下のみで、赤彩はないものとみられる。器形では26は胴部最大径が下にあり稜のある屈曲した形で、35はこれよりもやや最大径の位置が上がり稜が不明瞭となる。39の口縁部は受け口状に立ち上がる。

・高杯：30・46以外は赤彩で、36が脚部高17cmと大型である。45・46の口縁部は強く外反するもので、45は杯部中位に明瞭な稜を持って立ち上がるが、46は不明瞭である。

・鉢：48は口縁下に稜をもち、口縁端部が細く垂直に立ち上がる。

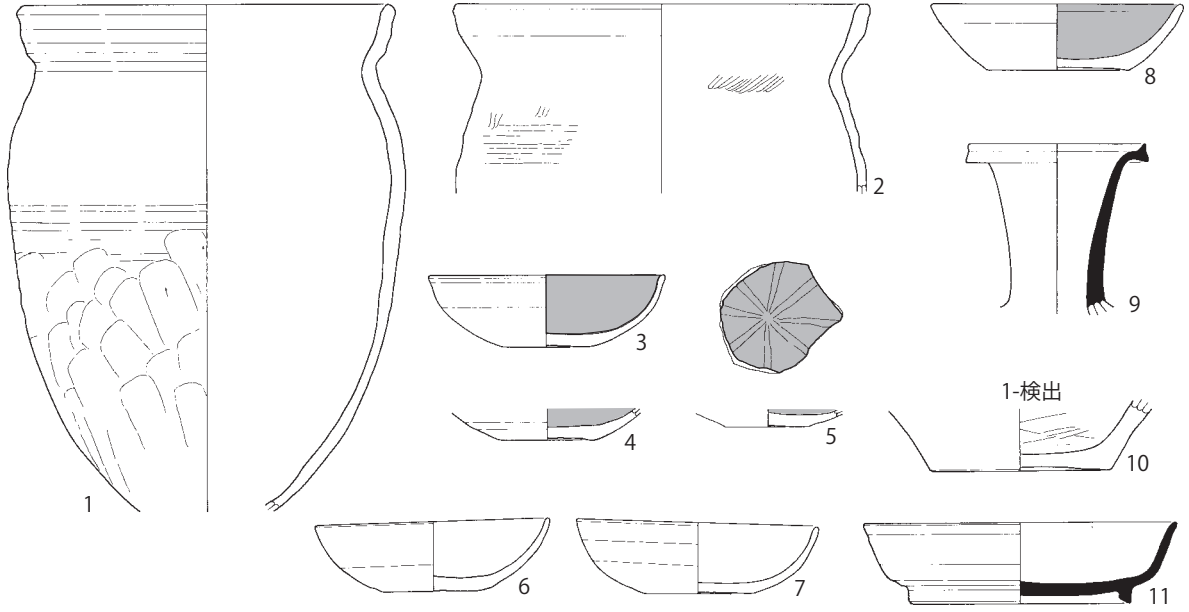
以上から、土器は弥生時代後期箱清水式であり、全体の出土量が多くはないことから検討できる資料は少ないが、主な器種の様相については、甕では文様は櫛描の波状文が中心で、波状文と簾状文および直線文の施文は粗雑なものが多くみられ、出土位置が包含層にあたる51のみ口縁部に刻みがある。壺は出土数自体が少ないが、文様はT字文、赤彩はあるものとなないものがある。高杯は脚部の装飾はなく、口縁が外反し垂直に開くものと杯部が底部から垂直に立ち上がる小型とがある。全体では無紋のものは少なく、特に赤彩でみると、赤彩塗布がされる器種のなかで赤彩がみられないのは12・46、穿孔のある壺32のみと、このほかの破片資料を含め、全体に赤彩が多用されていることがみられる。

同時期の集落の前回調査の町川田遺跡、資料の多い川田条里遺跡と春山B遺跡と合わせてみると、これらの遺跡では弥生時代中期から古墳時代前期までの期間みられる中で、本遺跡は後期のみ限定され、さらに弥生時代後期では、町川田遺跡（前回調査）は後期後半の住居跡が最も多く、周辺の調査例においても住居数が増える時期となり、春山B遺跡では後期中葉が中心とされている。この様な中で本遺跡は、後期中葉から後半にかけての時期で、特に後期後半においては、町川田遺跡よりも早い段階で収束する期間の短い集落域であったことが考えられる。

平安時代

1-SB1

1-SX1



弥生時代後期

2-SB1

2-SB4

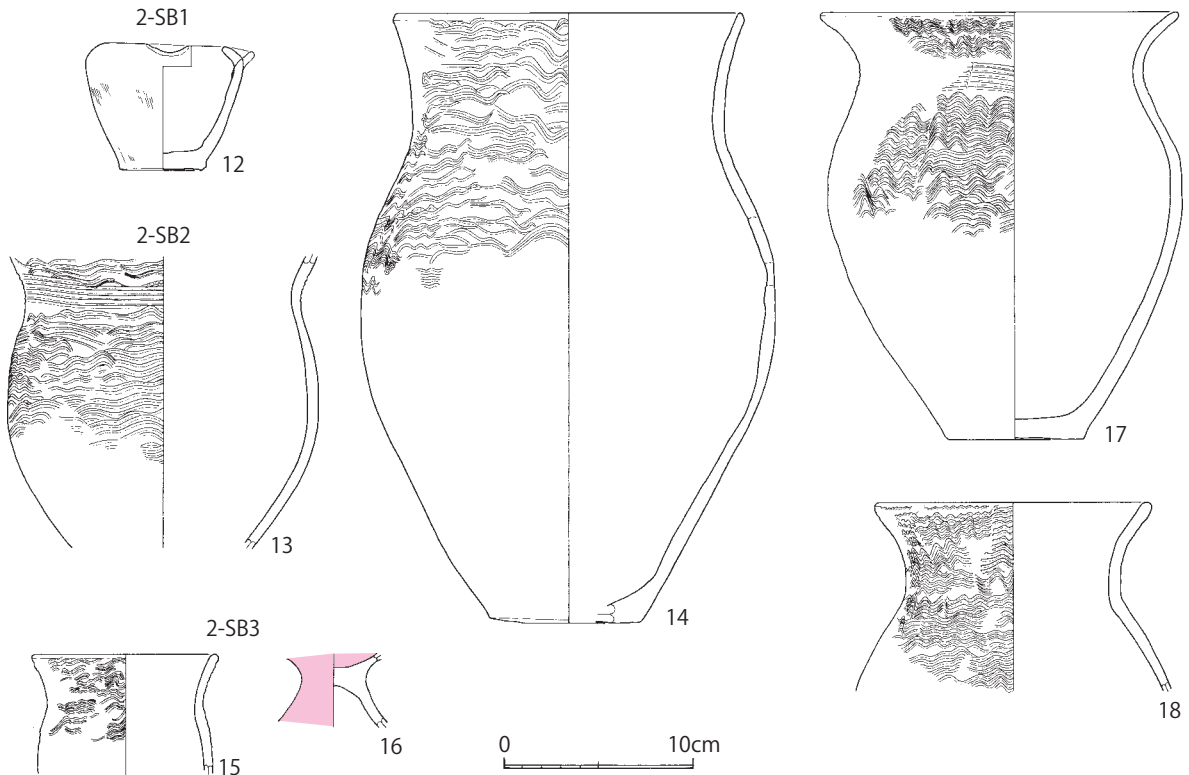


图13 土器実測图1 (1 : 4)

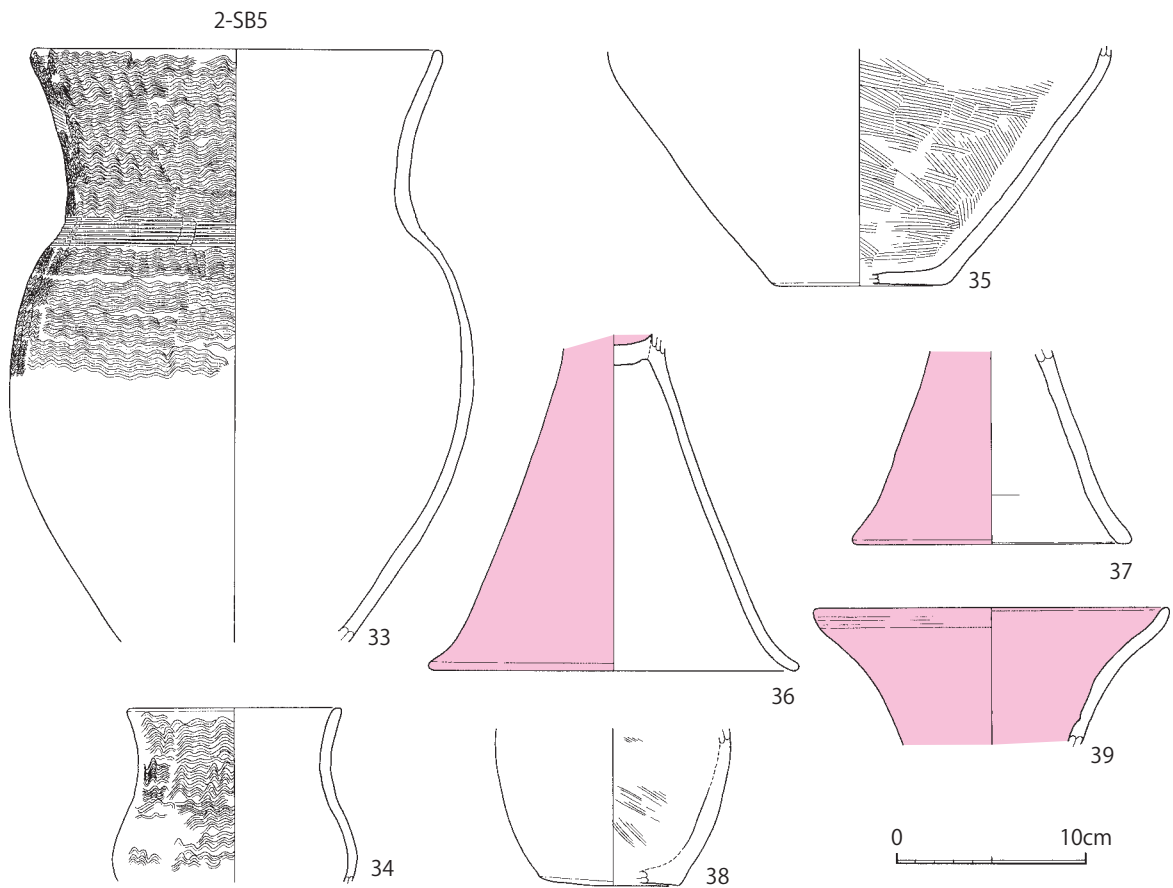
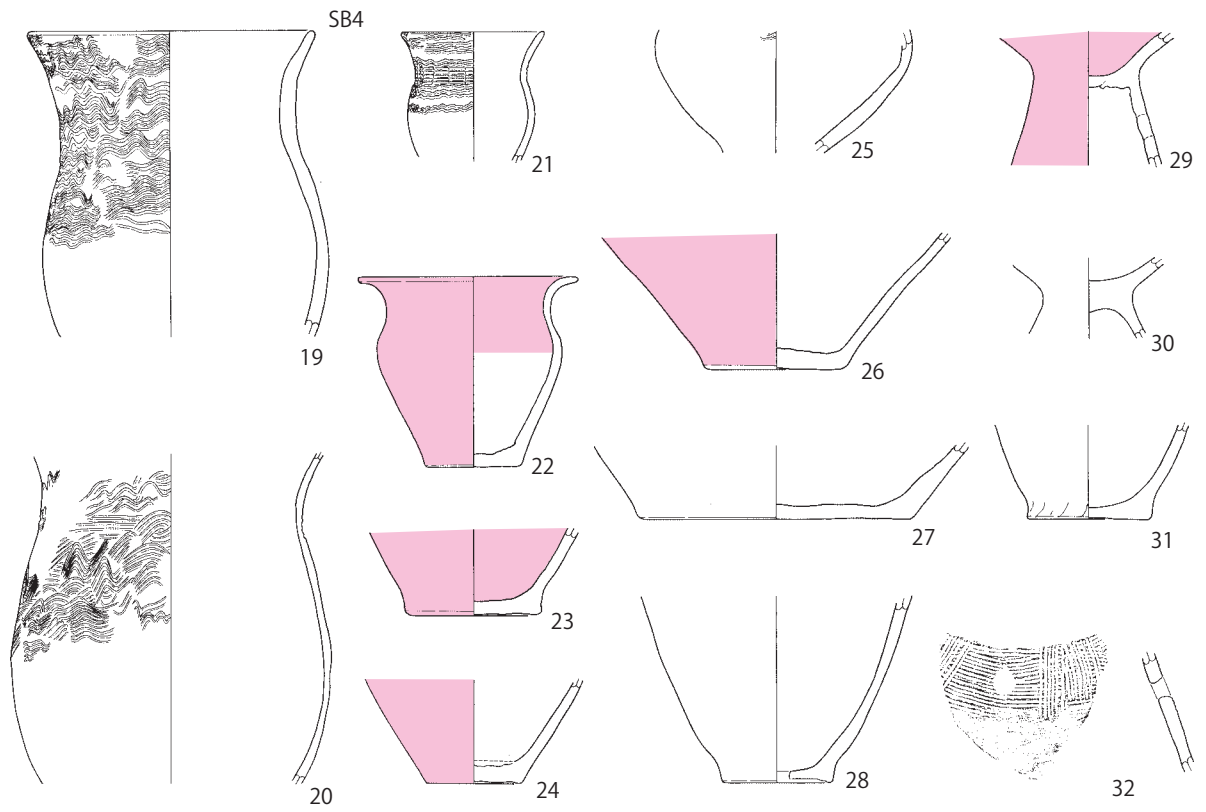


图14 土器实测图2 (1 : 4)

1-トレンチ1・2

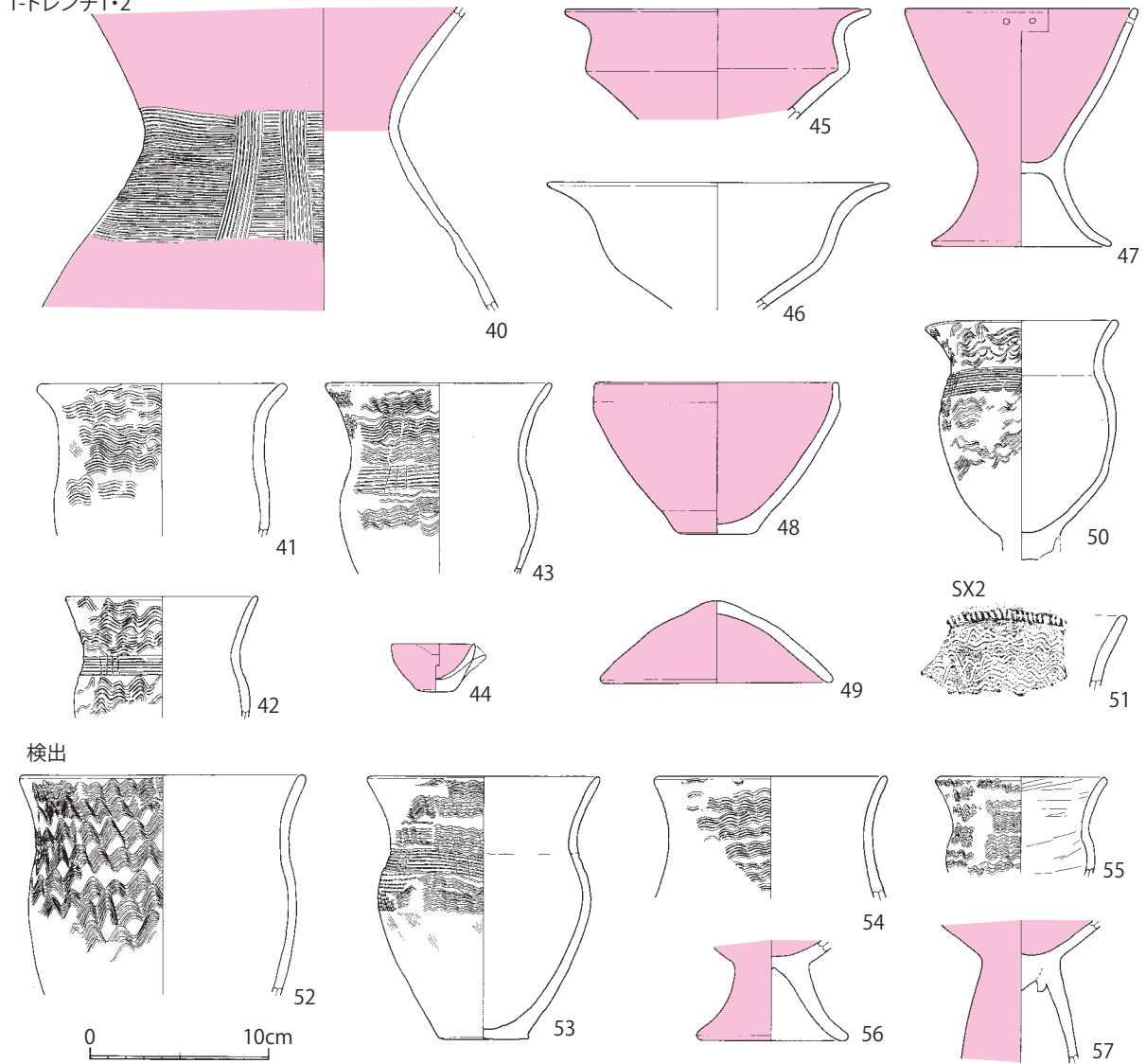


図15 土器実測図3 (1:4)

表2 土器観察表

図版 図番号	時期	種別	器種	残存部		調整・その他 外面/内面/底部	出土遺構			
				部位	量		面	遺構	位置	
13	1	平安時代	土師器	甕	口縁～底部	4/5	カキメ/ハケ	1	SB 1	カマド周
	2	平安時代	土師器	甕	口縁～胴部	1/5	ナデ/ハケ	1	SB 1	床No.1・7
	3	平安時代	土師器	杯	完形	4/5	ナデ/内黒処理/ヘラ切	1	SB 1	床No.4
	4	平安時代	土師器	杯	底部	2/3	ナデ/内黒処理/回転糸切	1	SB 1	床No.1・7
	5	平安時代	土師器	杯	底部	1	ナデ/暗文/ヘラ切	1	SB 1	床No.7
	6	平安時代	土師器	杯	完形	1/3	ナデ/ナデ/回転糸切	1	SB 1	床No.6
	7	平安時代	土師器	杯	完形	1	ナデ/ナデ/ヘラ切	1	SB 1	床No.4
	8	平安時代	土師器	杯	完形	1	ナデ/内黒処理/ヘラ切	1	SX 1	南西
	9	平安時代	須恵器	瓶	頸部	1	自然釉	1	SX 1	
	10	平安時代	土師器	甕	底部	1	ハケ/回転糸切-ナデ	1	検出	
	11	平安時代	須恵器	高台付杯	完形	2/3	ナデ/ナデ/回転糸切-ナデ	1	検出	
	12	弥生時代後期	弥生土器	片口鉢	完形	1	ミガキ/ナデ	2	SB 1	床面
	13	弥生時代後期	弥生土器	甕	頸部	1/2	波状文・直線文ミガキ/ミガキ	2	SB 2	検出

図版	番号	時期	種別	器種	残存部		調整・その他	出土遺構		
					部位	量		外面/内面/底部	面	遺構
13	14	弥生時代後期	弥生土器	甕	完形	1/3	波状文・ミガキ/ミガキ・ナデ	2	SB 2	覆土
	15	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	1/4	波状文・ミガキ/ミガキ	2	SB 3	覆土
	16	弥生時代後期	弥生土器	高杯	杯~脚部	1	赤色塗彩/赤色塗彩	2	SB 3	覆土
	17	弥生時代後期	弥生土器	甕	完形	2/3	波状文・簾状文・ミガキ/ミガキ	2	SB 4	覆土
	18	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部		波状文/ミガキ	2	SB 4	覆土
14	19	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	1	波状文・ミガキ/ミガキ	2	SB 4	覆土~床
	20	弥生時代後期	弥生土器	甕	頸部~胴部	1/2	波状文・直線文/ミガキ	2	SB 4	覆土~床
	21	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	1	波状文・簾状文・ミガキ/ミガキ	2	SB 4	覆土~床
	22	弥生時代後期	弥生土器	甕	完形	4/5	赤色塗彩/赤色塗彩-ミガキ	2	SB 4	覆土
	23	弥生時代後期	弥生土器	甕	胴部~底部		赤色塗彩/赤色塗彩	2	SB 4	覆土~床
	24	弥生時代後期	弥生土器	甕	底部	1	赤色塗彩/ミガキ	2	SB 4	覆土
	25	弥生時代後期	弥生土器	台付甕	胴部~底部	2/3	波状文-ミガキ/ミガキ	2	SB 4	覆土
	26	弥生時代後期	弥生土器	壺	胴部~底部	2/3	赤色塗彩/ナデ	2	SB 4	床No.2
	27	弥生時代後期	弥生土器	壺	底部	1	ミガキ/ナデ	2	SB 4	検出
	28	弥生時代後期	弥生土器	甕	胴部~底部	1/4	ミガキ/ミガキ	2	SB 4	覆土
	29	弥生時代後期	弥生土器	高杯	杯~脚部	1/2	赤色塗彩/赤色塗彩	2	SB 4	覆土~床
	30	弥生時代後期	弥生土器	高杯	甕~脚部	1	ミガキ/ミガキ	2	SB 4	覆土
	31	弥生時代後期	弥生土器	甕	胴部~底部	1	ミガキ/ミガキ	2	SB 4	床No.1
	32	弥生時代後期	弥生土器	壺	胴部	1/5	T字文・円形穿孔/ミガキ	2	SB 4	覆土
	33	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	4/5	波状文・簾状文-ミガキ/ミガキ	2	SB 5	床No.5・8
	34	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	1/4	波状文/ミガキ	2	SB 5	床No.4
	35	弥生時代後期	弥生土器	壺	胴部~底部	1/3	ミガキ/ハケ	2	SB 5	床No.6
	36	弥生時代後期	弥生土器	高杯	脚部	1	赤色塗彩/ミガキ・ナデ	2	SB 5	床No.2
	37	弥生時代後期	弥生土器	高杯	脚部	1	赤色塗彩/ナデ	2	SB 5	床No.7
38	弥生時代後期	弥生土器	甕	胴部~底部	1/3	ミガキ/ハケ	2	SB 5	床No.1	
39	弥生時代後期	弥生土器	壺	口縁	1	赤色塗彩/赤色塗彩	2	SB 5	床No.4	
15	40	弥生時代後期	弥生土器	壺	頸部~胴部	2/3	T字文・赤色塗彩/赤色塗彩	2	トレンチ1	北東
	41	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	1/4	波状文/ミガキ	2	トレンチ2	北東
	42	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	2/3	波状文・簾状文/ミガキ	2	トレンチ2	
	43	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	2/3	波状文・簾状文/ミガキ	2	トレンチ1	
	44	弥生時代後期	弥生土器	ミニチュア	完形	2/3	赤色塗彩/赤色塗彩	2	トレンチ1	北東
	45	弥生時代後期	弥生土器	高杯	杯部	1/4	赤色塗彩/赤色塗彩	2	トレンチ1	北東
	46	弥生時代後期	弥生土器	高杯	杯部	1/4	ミガキ/ミガキ	2	トレンチ1	
	47	弥生時代後期	弥生土器	高杯	完形	2/3	赤色塗彩・口縁穿孔/赤色塗彩	2	トレンチ2	
	48	弥生時代後期	弥生土器	鉢	完形	4/5	赤色塗彩/赤色塗彩	2	トレンチ2	
	49	弥生時代後期	弥生土器	蓋	完形	1/5	赤色塗彩/赤色塗彩	2	トレンチ2	
	50	弥生時代後期	弥生土器	台付甕	甕部	1	波状文・簾状文/ミガキ-ハケ	2	トレンチ2	
	51	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁	1/5	刺突・波状文/ミガキ	2	SX2	
	52	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	1/4	波状文/ミガキ	2	検出	
	53	弥生時代後期	弥生土器	甕	完形	2/3	波状文・簾状文/ミガキ-ハケ	2	検出	
54	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	1/4	波状文/ミガキ	1	検出		
55	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁~胴部	1/4	波状文/ミガキ-ハケ	2	検出		
56	弥生時代後期	弥生土器	高杯	杯~脚部	1	赤色塗彩/赤色塗彩	2	検出		
57	弥生時代後期	弥生土器	高杯	杯~脚部	2/3	赤色塗彩/赤色塗彩	2	検出		

2 石器・石製品

・石器

安山岩製の石皿。両面ともに平坦で、片面に擦痕があり、検出時には上を向いて置かれていた。

1は縁まで擦痕がみられ、全体が使われている。欠損しているが、出土位置が住居床面であることなど、故意に割られていた可能性も考えられる。

2はやや縁が残り、中央にくぼみがみられる。完形で同じく住居床面からの出土である。

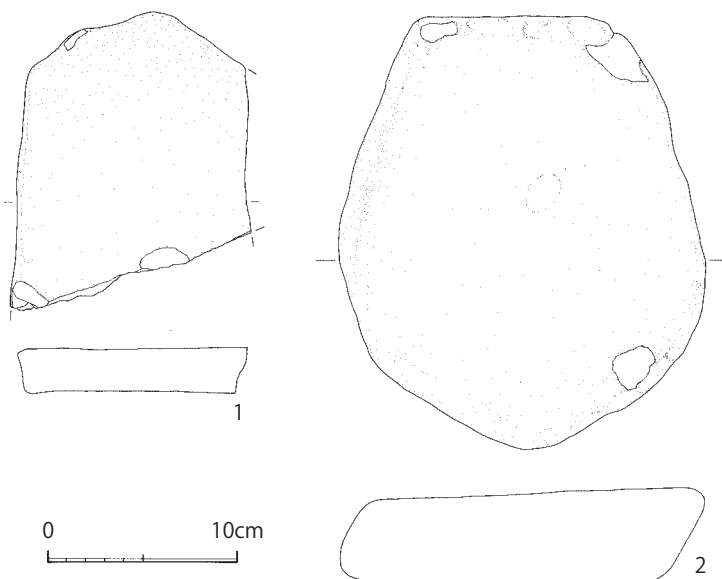


図16 石器実測図 (1 : 4)

・石製品

鉄石英製の管玉で、住居内の堆積炭化物中からの出土である。細型のもので、長さ1.4cm、径は0.3cm、端がわずかに欠けるが完形である。断面形は円形で、調整は全体に細かな縦方向の磨きにより整えられている。

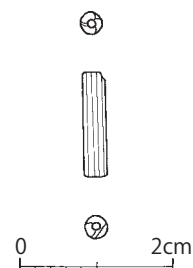


図17 石製品実測図 (1 : 1)

3 鉄製品

刈り鎌で、刃部先端部分が欠損する。全長は26cmほどと推測され、刃部の幅は残存部で3.3~2.4cmで、基部に向かって幅が広くなり、基部幅は3.6cmである、基部折り返しは上部から半分ほどまでが直角に曲げられている。

なお、表4の重量は保存処理後のものである。

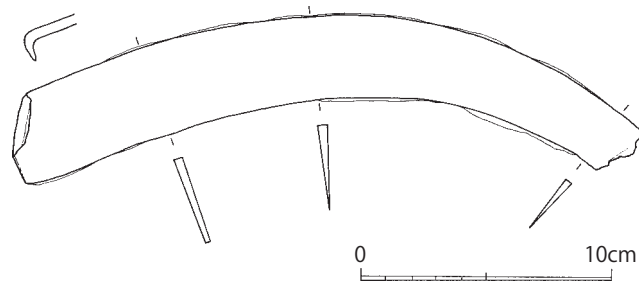


図18 鉄製品実測図 (1 : 3)

表3 石器・石製品観察表

図版 図番号	時 期	種 別	器 種	残存量	重量 (g)	調 整 ・ その他	出土位置			
							面	遺 構	位 置	
16	1	弥生時代後期	石器	石皿	1 / 3	811	安山岩製	2	SB 4	床面
	2	弥生時代後期	石器	石皿	完	3.680	安山岩製、中央にくぼみ	2	SB 2	床面
17	弥生時代後期	石製品	管玉	完	0.3	鉄石英製、縦方向の研磨	2	SB 4	覆土下層	

表4 鉄製品観察表

図版 図番号	時 期	種 別	器 種	残存量	重量 (g)	調 整 ・ その他	出土位置		
							面	遺 構	位 置
18	平安時代	鉄製品	鎌	4 / 5	122	刈り鎌	1	SX 1	覆土

第Ⅳ章 まとめ

調査は2面を対象に行い、平安時代と弥生時代後期の遺構と遺物を検出した。主な遺構は、1次面の平安時代は住居跡1軒、溝2条、性格不明遺構、2次面の弥生時代後期は住居跡5軒である。

平安時代住居は北東方向を向いたカマドを検出し、袖石・支脚石と手前に落ちた天井石が残り、カマド周辺には甕や杯が置かれていた。また、遺構の範囲確認はなかったものの(SX1)土器・獣骨片とともに鉄製鎌を検出した。溝は、遺物の出土がほぼないことから時期をみることはできないが、SD1がSX1と重複し、SD1の覆土の上にSX1出土の遺物がのることから、SX1よりも前のものと判断される。

弥生時代後期遺構は、1次面の検出面から約50cm下で確認した。1次面よりも包含層及び検出での土器の出土が多く、さらに1次面の調査区北側で遺構と下面確認のために入れたトレンチから弥生時代後期土器が多く出土した。遺構は、住居5軒が隣接または重複して調査区全体で密に存在している。住居はすべて平面長方形で、隅の形態などやや違いはみられるものの規模は長辺が5.6~5.7m、短辺が4.0~4.3mとほぼ同じ大きさで、炉は5軒中4軒で可能性があるものも含め検出し、位置は3軒が北壁、1軒が東壁付近で長さが26cm前後の石が手前に置かれたものである。このほか床面には炭化面が残り、意図的に土器が置かれていた状況がみられるが、この中でSB4は、覆土下半から土器片に混じって炭化物が入り、長辺の約2/3の範囲で床面上にレンズ状に炭化物が堆積し、鉄石英製の管玉が出土するなど他とは違う様相を呈している。

本調査区は千曲川の自然堤防上に位置する、丘陵に囲まれた場所で、集落は扇状地上に縄文時代から展開し、弥生時代以降には自然堤防上にも造られるようになる。本調査区に近い昭和62年度に行われた町川田遺跡は千曲川自然堤防上の集落を最初に確認したもので、弥生時代中期・弥生時代後期・弥生時代終末~古墳時代前期・平安時代の各時代の集落が確認されている。遺跡の立地から一連の集落であることが考えられるが、前回調査地区よりも今回では集落の時期が弥生時代後期と平安時代と限られている。本調査区の立地と集落の時期については、立地では調査区から40m北側では、現地表面直下から河川の砂層となり遺構が存在しないことを確認しており、この範囲の中で遺構が収束していることが考えられる。前回調査の町川田遺跡からみておおよそ500m千曲川(西側)に寄った位置となり、南側は大星山の麓に接する位置にまで広がっている。集落は弥生時代後期から平安時代までの間空白期間については、1次面と2次面の検出面の差は45cm、1次面の遺構面から2次面の包含層上面までは約25cmの堆積があり、1次面で弥生時代後期の遺物がみられたが、この他の時期のものはみられない。さらに、弥生時代遺構面下(住居床面直下)からはレキ層となっており、1次面包含層から2次面弥生時代後期遺構覆土まではほぼレキなどを含まない層であるのに対して、住居床面直下から以下レキを含む層となっていることから、この位置では自然堤防上に展開する弥生時代中期からの集落が、川田条里遺跡で確認されている千曲川の氾濫による土砂の堆積等による地盤の変化に伴い、弥生時代後期になりこの範囲まで展開するようになったことがうかがわれる。

今回の調査と同時期なのは弥生時代後期と平安時代であるが、この中で弥生時代後期では、周辺の遺跡で北陸系土器が、本調査では弥生時代中期から後期にかけてみられる鉄石英製の管玉が住居内から出土している。春山B遺跡では鉄石英製玉類の製作跡が確認されており、石材などからも北陸地方などとの交流が示されている。

本調査は、調査面積が160㎡と狭いものの平安時代と弥生時代後期の集落を確認し、特に弥生時代後期においては住居が密に存在し、中期よりも千曲川に近い位置まで集落が広がり、南側は山の麓まで造られるといった集落の立地の変化について確認することができた。







図16- 2



図16- 1

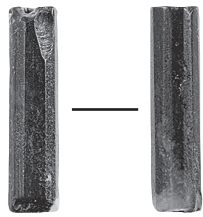


図17



図18

※土器番号は実測図（図13～15）番号に対応する。

ふりがな	まちかわだいせき
書名	町川田遺跡（2）
副書名	令和元年度防災・安全交付金（道路）工事（関崎橋東）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第156集
編著者名	遠藤恵実子
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL：026-284-0004 FAX：026-284-0106
発行年月日	2020（令和2）年12月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
まちかわだいせき 町川田遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 わかほかわだ 若穂川田 2562-10 外	20201	G-015	36° 38' 54"	138° 11' 41"	2019.9.9 ～ 2019.10.16	160㎡	どうろけんせつ 道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
町川田遺跡	集落	弥生時代 後期		住居 5軒 土坑・ピット		弥生土器 石皿 管玉		
		平安時代		住居 1軒 溝 2条 性格不明遺構 2 土坑・ピット		土師器、須恵器 鉄製鎌 (獣骨)		
要約	<p>千曲川の自然堤防上に位置する集落遺跡である。2面を対象とした調査を行い、1次面では平安時代、2次面では弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。</p> <p>平安時代の住居では、カマドを良好な状態で検出し、このほか性格不明遺構からは、鉄製鎌のほか獣骨片が出土した。弥生時代後期は、住居5軒が密に位置している。炉や炭化面を検出したものが多く、中でも床面上に炭化物が堆積していた住居跡からは、土器と一緒に鉄石英製の管玉が出土した。</p>							

長野市の埋蔵文化財 第156集

町川田遺跡（2）

令和2年12月25日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 長野市埋蔵文化財センター
印刷 信毎書籍印刷株式会社